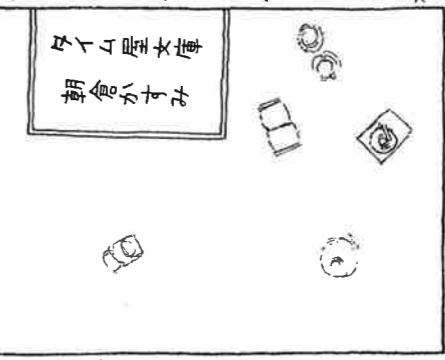


はら。

市居格子は目をあけた。

「タイム屋文庫」



アガシンハウス 一五〇〇坪+棟

タイム屋文庫  
朝倉かすみ

二〇〇八年五月発行

市居格子、31歳。祖母、ツボミが101歳で亡くなったばかり。格子はひとり、祖母の家へ移り住み、居間で『タイム屋文庫』の店名前の本『タイム屋文庫』、時間旅行にかんする本『タイム屋文庫』、時間旅行に『タイム屋文庫』にかき置いている。彼らのなかには流れる過去→未来、というま、すくなく時間、店のおかまでまじりくろくするようない空間。  
祖母が遺した空間で、格子が感じる景色は、ゆりかごに安寝しながら、格子を分けた、時間へとみちびいてゆく。

たいてい二冊分をしております。  
「青春若草の女通信」30号です。  
今回は『朝倉かすみ号』と題して、  
朝倉かすみさんの作品を4冊紹介しております。  
「タイム屋文庫」  
「地図とスイッチ」  
「わたしたちはその赤い坊を応援することにした」  
「乙女の寮」

朝倉かすみさんはすばらしいです。読んで。



青衣若草 朝倉かすみ  
1/4/17 → @aioi-myoga  
✉ → aioimyoga@gmail.com

# 「地図とスイッチ」

実業之日本社 一四〇〇円十税



朝倉かすみ

二〇一四年十一月発行

「おないどし」というだけで、無条件に感じる近しさがある。けれど、やはり他人だから、すぐに歩みよることはできない。だからこそ、ふたりの人生を読みながら、「ああこのふたり、ちゃんと出会ってほしいなあ」と思う。ふたりの描く「地図」が、豊かな景色になればいいなあ、と思う。

蒲生栄人、仁村拓郎。1972(昭和47)年9月8日、同じ病院で生まれたふたり。母親同士も同級生で、病室も同じだったけれど、退院後は顔を合わせることもなく、栄人と拓郎は、お互いを知らないまま、現在40歳。

栄人は、友人が経営するインテリアショップで働きはじめたばかり、拓郎は、高校卒業後に就職した鉄道会社でずっと働き、先月入籍したばかりだ。今の状況について考えながら、ふたりは、今までの人生を断片的にふり返る。個人の時間とともにあられるのは、あのととき流行、たまたま、あのととき起きた事件、という、「時代」の景色。そのなかにいた、昔の自分の姿と、これから、自分の姿を、ふたりは、どう描くのか。

# 「乙女の家」

新潮社 二〇一五年二月発行



二〇〇〇円十税

若竹若菜、高校2年生。祖母の家で、母、弟とともに暮らしている。両親は2年前から別居しているけれど、平日は父と一緒に夕食を食べる。「夕食は家族そろって食べる」というのが、別居の際、母が出した条件だった。若菜はそんな母を、「かたご」というものを「産み落す傾向の人だ」と思う。

一方、若菜は自分を「伊ネ雷同型」と思う。自分を主張せず、「水中をただようクラゲ」のように「友だちや、家族のあいだで、ふかふかさまかんで」いるだけ。だから若菜は「他者」に代わって「特待生」を持たせる「華やかな人物像」を探していた。「自分」が「主体」となるものではなく、「他者が目にする『若菜という人』の「イメージ」。自分探し、ならぬ「だれか探し」なのだ。

曾祖母、祖母、母、同級生の高橋さん...個性的で波乱万丈な女生たちとの時間のなかで、若菜は何を感じ、考えるのか。若菜という女性の、心のなかの道のりを、ずいずいと見守っていたくなる。

いま、この瞬間、とてつもない数の人間が同時に生きている。それぞれがそれぞれの人生のなかで、何かを考え、感じながら、まど「だれか」を思っている。

とてつもない数の「思い」が、世界をまわまわと覆っている...少し不気味で、少し怖いけれど、ときにそれは希望にもなる。「だれか」に「何か」を思うことをやめられない。だから人間はみもろしい。「思い」が凝縮した、7つの短編集。

二〇一五年二月発行 一四〇〇円十税



わたしたちはその赤ん坊を応援することにした  
朝倉かすみ

幻冬舎

# 「わたしたちはその赤ん坊を応援することにした」

